



自然・ひと・体験

編集：日本野外教育学会広報委員会

発行：日本野外教育学会事務局

〒305-8574 つくば市天王台 1-1-1 筑波大学体育系野外運動研究室
TEL&FAX. 029-853-6339



第17回学会大会(東京海洋大学越中島キャンパス) 自主企画シンポジウムより

特集 日本野外教育学会第17回大会 報告

日本野外教育学会第17回大会報告

2～8

事務局便り

8～9

日本野外教育学会第17回大会 報告

◆ 日本野外教育学会第17回大会を終えて

大会実行委員長 千足 耕一(東京海洋大学)

第17回学会大会は、シンポジウムや講演会において「海」をテーマにすることとして計画を進めました。学会大会は2014年6月24日～6月25日の2日間、東京都江東区の東京海洋大学越中島キャンパスを会場として開催させていただきました。大会参加者は、シンポジスト等を含め延べ約200名で、自主企画シンポジウム4件、大会実行委員会企画シンポジウム、基調講演、懇親会(参加者137名)、口頭およびポスターによる研究発表と実践報告(演題数60件)を含んだ学会大会でした。

1日目のシンポジウムでは、水辺の野外教育がどのように取り込まれてきたかということについて国立青少年教育振興機構、ブルーシー・アンド・グリーンランド財団、大阪YMCA阿南国際海洋センターでの歴史や実践について報告していただくとともに、京都大学の山下洋先生にキーノートスピーチをいただき、「山」「川」および「人間」との関わりを考慮した水辺の野外教育の展望を見出す機会となることを目指しました。

また、2日目の講演会では夢や目標の重要性、および、体験を通じて学ぶことの大切さを再認識し、我々学会員の取り組むべき課題を発見できる機会にしたいと考え、海洋冒険家で著名な白石康次郎さんの講演会を企画し、実行してきました。

講演会・シンポジウムともに、参加者のみなさまからは、良い企画であったとのたくさんのお褒めの言葉を賜りました。特に白石康次郎さんの講演は、日本野外教育学会にエールを送って下さるような内容がたくさん含まれていたように感じました。「自然から学ぶことが尊いこと」、「(海や自然は)あるがままであること」、「自分を捨てること」、「錬度を上げること」、「精神筋力を鍛えること」、「変化に対応すること」、「受け入れること」、「覚悟すること」、「忍の必要性」などについて、実例をあげながら、わかりやすくお話し下さいました。また、それらを実践されてきた(いる)ところに感銘を受けたみなさまも多かったのではないかと推察します。

これまでの学会大会の歴史では、「海」を主題とした学会大会は行われてきませんでした。本大会の企画を通じ、学会員の皆様が海に目を向け、海を知り、海を守り、海を活用するきっかけとしたいと考えましたが、どの程度その目標が達成されたかを再考すべき時かもしれませ

ん。

夏休み前に学会大会を無事に終え、すぐに夏の巡業に入ったため、学会大会の振り返りが不十分であったことも反省しなければなりません。また、実行委員会のみなさまからは、「挨拶の大切さとスタッフ間のコミュニケーションの大切さを再認識した」、「心に残る学会大会となった」、「有意義な学びと出会いのある学会であった」などとお言葉をいただいております。次年度からの学会大会に向けて、本大会の反省を今一度まとめておきたいと考えます。

最後になりましたが、日本野外教育学会第17回大会を終えまして、まずはご参加くださいました全てのみなさまに御礼を申し上げます。また、学会への協賛をいただきました企業・団体のみなさまにも厚く御礼を申し上げます。



日本野外教育学会第17回大会をお受けした際から、かなりのプレッシャーがありました。弱小国立大学で、所属教員は実行委員長1名のみ。大学院博士後期課程所属の蓬郷氏には、膨大なご負担をおかけしてしまいました。関東支部のみなさまからの多大なるご尽力を賜り、何とか学会大会を無事に、赤字を出すことなく終了できました。持つべきものは友であると心から実感できた大会でした。ホッと胸をなでおろすと同時に、これから学会大会を主催されますみなさまのご健勝と、日本野外教育学会の益々の発展を祈念いたします。

◆ 講演会

「夢、挑戦、そして人とのつながり」

白石康次郎 氏(海洋冒険家)



26歳のときに、当時の世界最年少記録で単独無寄港の世界一周を達成された、白石康次郎氏。それからさまざまな挑戦を続けてこられた白石氏に、ご自身の経験とそこから得た教訓等をお話いただきました。

白石氏は2度、世界一周に失敗されています。全力を尽くしているのになぜ、と悩んだとき、世界一周をしようがしまいが海には無関係だということに気づいたといいます。自分の思いというフィルターがかかっていると判断を誤るため、己を捨てなければならないということを悟ったのだそうです。

自然は人を選びませんし、海は自分の思うようには動いてくれません。あるがままの姿であり、そこには希望も絶望も、楽観も悲観もありません。このように天地自然は人間が作り出したものではないというところに、野外教育の可能性があるといいます。また、白石氏は海での活動プログラムや冒険授業も積極的に展開されており

ますが、そこでは“明日死ぬかもしれない”という“本物”を感じることができ、そこに良さがあると述べられました。

野外教育には必ずリスクが伴いますし、厳しいことをするので事故がおきることもあります。しかし、危険のあるところに入らなくてはその対処法は身に付きません。危険から逃げ惑うことのないように、危険に対処できる能力を身につけるために、野外教育は適しているといえるのです。そして世の中全体がトレーニングの場であった昔と違い、現代はわざわざ厳しいことをしなくては身体も精神も鍛えられないという状況にあります。そのトレーニングの場としての可能性も野外教育は秘めています。時間をかけて、個々のレベルに合わせてトレーニングを重ねていくことで、鍛えられ、強くなることのできるのです。

自信があるから世界一周できたのではない、世界一周をしたから自信がついたのだという言葉が非常に印象的でした。

日本は、地震や津波、台風、火山など、様々な天災が起こり得る国です。自然を受け入れるということを通じて、変化を恐れず変化に対応できる子どもを、そしてどんな嵐も乗り越えていく力のある子どもを育てていくことができるはずで

す。自分が生き残らないと人は救えません。自分が幸せでないと人に幸せを伝えられません。明るく楽しく、そして厳しく忍耐と覚悟をもって自然と向き合うことで、強く逞しい子どもを育てていきたいと白石氏は述べられました。

報告者：田熊さやか(国士舘大学大学院)、永吉英記(国士舘大学)

◆ 実行委員会企画シンポジウム

「水辺活動の教育的可能性」

キーノートスピーチ：山下洋 氏(京都大学フィールド科学教育研究センター教授)

シンポジスト：松村純子 氏(国立青少年教育振興機構)

遠藤卓男 氏(ブルーシー・アンド・グリーンランド財団)

橋本啓 氏(大阪YMCA阿南国際海洋センター)

コーディネーター：柳敏晴 氏(神戸常盤大学教育イノベーション機構教授)

水があるから命が生まれ、水によってさまざまな命がつながっています。本シンポジウムは、海を含めた水辺はどのように教育に活用できるのか、その可能性を探ることを目的として開催されました。

キーノートスピーチでは、京都大学の山下洋氏に、主に森里海連環学と京都大学フィールド研究所の取り組みについてご報告いただきました。

自然環境はさまざまな生態系が絡み合って存在しています。そのため、1つの生態系だけに焦点をあてたのでは問題は解決しないという観点から、森里海連環学という新しい学問が生まれました。森林や河川、沿岸、海洋などの生態系の繋がりを科学的に明らかにすることで、人と自然のかかわり方を考え直すというものです。

現代の問題として、子どもや若い人たちが自然の中で遊ばないことがあるといいます。このことが自然環境に興味を失い、自然環境に何が起こっても気にならなくなるという連鎖を生むからです。

このような問題に対して、自然の恵みによって人は生かされているのだということを、実際の体験を通して学ぼうという取り組みが京都大学フィールド研究実習で行われています。文系理系を問わず、フィールドに出て正解のないものを相手に自分で考えることを大事にしながら、分野横断的な広い視野での研究がなされています。

今後のフィールド実習で目指すものは、フィールドベースの環境教育、生態系の繋がりを意識した広い視野や観点からの学び、子どもや市民へ伝えていくこと、高度な分析や項目の多様化といった研究内容の充実であると述べられました。

その後、シンポジストとして3名の方に、登壇いただきました。松村純子氏は、国立青少年教育振興機構の取り組みとして、指導者のための体験活動における安全管理研修や水辺活動におけるリスクマネジメント、長期自然体験活動、環境を学ぶ活動等の活動報告をいただきました。青少年教育の振興と青少年の健全育成という目的のもと、今後も安心・安全な環境のもとで思い切り子どもが水辺活動できるように日々取り組んでいきたいとのことでした。

遠藤卓男氏にはB&G財団における水辺の活動と教育的効果についてご報告いただきました。海や川の安全教育や

学校教育と連携した水辺での体験、また指導者養成、ネットワーク構築と研究等にも力を入れているとのことでした。自然を通じた感動体験は知的好奇心を増大させ、自主・自立や学習意欲、社会性の向上に役立つといい、保護者の海ばなれを防ぎ、機会の提供を継続していくことを今後の課題としています。



橋本啓氏からのご報告では、大阪YMCAの実践とそのねらいを知ることができました。SPIRIT MIND BODYのバランスのとれた生涯を通しての全人的成長、そして他者と共に生きる力を育むことをめざし、試行錯誤しながらも自然の力と自分の力で進んでいくアクティビティを提供されています。“したい”という気持ちを見つけさせ安心してチャレンジできるようにする、発想を具現化できるようにすることが提供する側の役目だと述べられました。

最後に、全体での話し合いの場がもたれ、水辺だからこそ得られる独自性とは何か議論がかわされました。日本でありながら和船のプログラムがないことへのご指摘もありました。「日本の独自の文化をどのようにつなげていくかが今後の課題であること」、「パソコンやスマートフォンに時間やお金をかける現代に、どのようにフィールドに出る機会を提供していくのかを考えていく必要があること」、「生涯教育として子供からお年寄りまで、さまざまな機会を提供すること」、「世代を超えた相互の伝え合いを実現させ、アクティビティの高まりを目指していくことが理想的である」などの意見がだされました。

報告者：田熊さやか（国士舘大学大学院）、永吉英記（国士舘大学）

◆ 自主企画シンポジウム

「自閉症と豊かな暮らし ～キャンプ・ロイヤルから学ぶ～」

石田易司(桃山学院大学) 竹内靖子(桃山学院大学) 野口和行(慶應義塾大学)

キャンプを通して、自閉症のある人たちの成長・自立、彼らの住みやすい社会を実現することに挑戦しているアメリカと日本の取り組みを紹介しました。はじめに、1997年にノースカロライナ州の自閉症のある人たちのために作られたキャンプ場「キャンプ・ロイヤル」の実践報告と工夫を説明しました。さらに日本(主に、アサヒキャンプ・キャンピズ)においても同じように彼らの特性に合わせたキャンプ活動を通して、彼らの成長・自立支援

や地域の理解やサポートをどのように行ってきたのかについて報告しました。またキャンプを通して福祉を学ぶ院生からの報告もあり、自閉症のある人のキャンプ関係者や興味のある人たちと国を超えた共通する感動・課題・これからの取り組みについて話し合う貴重な機会となりました。詳細については、2014年7月に出版された『自閉症と豊かな暮らし～キャンプ・ロイヤルから学ぶ～』(晃洋書房)をご一読いただけますと幸いです。

報告者：竹内靖子



「若者よ野外に夢を ～今後の野外教育を考える～」

徳田真彦(大阪体育大学大学院) 水津真委(びわこ成蹊スポーツ大学大学院)

橋本和俊(京都教育大学大学院)

「何か」、若者から野外教育の発展の為にできることはないかと、一心不乱に考え決行したシンポジウムでした。不安は多くありましたが、当日は30人を超える人々に参加して頂きました。シンポジウムでは、「実践」「研究」「将来」という3つの視点から「野外教育」を見つめ、年齢も活動している地域も、さらには立場も全く異なる人々が、それぞれの現状、これからについて話し合いました。それは様々な視点から見つめることができた一方で、2時間という限られた時間の中では到底ま

とめ得るものではなかったように思います。しかし、それぞれの意見を擦り合わせながら、少しでも野外教育が発展するには?と試行錯誤する姿は、まさにこれからの



「未来」を創る姿だったのではないかと思います。題目通り、「若者」がこれからの「未来」を考え突き進む、それこそが今後の「野外教育」の発展に繋がるのではないのでしょうか。このシンポジウムで、多くの仲間、同志が全国にいること

に気がきました。自分を信じ、仲間を信じ、若者からも野外教育を発信していきたいと思えます。

報告者：徳田真彦

「野外教育における心理臨床的アプローチ ～事例に学ぶV～」

渡邊仁(筑波大学) 吉松梓(駿河台大学) 向後佑香(筑波大学) 坂本昭裕(筑波大学)
杉岡品子(北翔大学)

本シンポジウムは、キャンプの実際場面で起こってくる参加者(クライアント)とカウンセラーのキャンプ中の関わりや出来事を、事例を通してじっくりとふりかえることを目的としております。毎年継続して企画し、今年で5回目の開催となりました。当日は、まず話題提供者から「いじめがきっかけで不登校になった中学生女子の移動型キャンプの事例」について事例の報告(60分)があり、その後、質疑応答やディスカッション(45分)、指定討論者コメント(15分)が行われました。参加人数は28名でした。ディスカッションの中では、クライアントの心理的課題やキャンプの意味、クライアントとカウンセラーの心の距離感(関係性)、風景構成法から読み

取られること、キャンプ実践の概要に対する質問、などについて活発に議論が交わされました。毎年、企画者の一人として参加して感じていることは、たった一つのキャンプの物語(事例)ではありますが、その中に実践に役立つ種が無数にちりばめられているということです。このシンポジウムは、その種を発見し、様々な視点から捉え直し、想像力を働かせることによって、種を育てる土壌の役割を果たしているのではないかと思います。参加者の方々が、本シンポジウムから一つでも種を持ち帰り、ご自身のキャンプで花を咲かせる一助にいただければ幸いです。

報告者：吉松梓

「子供たちの体験活動が増えた？」

～調査から見える子供たちと私たちが見ている子供たちの体験の今～

齋藤雄(国立青少年教育振興機構)

国立青少年教育振興機構では、平成25年3月に、平成24年度に実施した青少年の体験活動や意識等の実態についての調査結果を公表しました。その調査結果からは、①子供の体験が増加傾向にある一方、体験が多い子と少ない子に2極化している傾向が見える、②子供の体験と子供の自己肯定感や道徳観・正義感に関係性がある、③保護者の関わりも子供の体験や自己肯定感などに関係性が見られる、といったことがわかりました。

学会の参加者の意識がこうした調査結果と果たして同じようなのか、また、この結果からはどのような現状や課題が見えるのか、話し合える場を作り、深めてみたいと考え、本シンポジウムを企画しました。約20名の参加者があり、当機構職員、大学教員、学生、民間など様々な所属の方々が集まりました。

調査結果を説明した後、「皆さんは、子供の体験が増えていると思いますか？」という問いかけをし、6～7名のグループで話し合い、その内容を発表してもらいました。

「今の大学生は体験が希薄であると感じているが、今の子供たちは様々な体験ができる環境が整っている」、「夏休みになれば、民間組織がキャンプなどの企画で子供の取り合いをしているし、塾やスポーツ系のスクールなどでも体験を実施するところが増えている。また、森のようなちえんなど自然の中での保育が注目されている」といったように、子どもたちに体験を提供する環境や機

会は確実に増えているとの意見が多くありました。

また、「ホームセンターに行けば必ずアウトドアコーナーがあり、山ガールをはじめとするアウトドアファッションなども流行し、定着しつつある」といった意見や、「社会風潮からみても、特に自然体験(アウトドア活動)が身近な存在となり、子供の親や若者が、自分たちの子供に『やらせたいな』、『一緒にやろうかな』と思うような時代になってきた」といった意見もありました。一方、「家庭環境や経済状況等により、体験格差も大きくなる可能性もある。海外では、経済的な家庭支援を行っている国もあり、子供たちの体験の機会を支える取組についても検討する必要があるのではないか」といった意見もあり、野外教育、体験活動の関わる一人一人が、こうした課題について考えていく必要性も挙げられました。

調査結果を単なる数値として見るのではなく、様々な方からの視点で見ていただくことで深まっていくことがわかりました。野外教育学会の研究の場は、体験活動の実践の場もあります。また体験活動を実践する、それ自体が体験活動の普及にもつながります。子供たちの体験が増える傾向があることは、体験活動に関わる人たちの活躍の成果とも言えるでしょう。今後も、こうした調査結果については、ぜひ学会で共有させていただきたいと思っております。ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

報告者：齋藤雄

◆ 第4回日本野外教育学会論文表彰

第4回日本野外教育学会論文表彰では、優秀賞は大石康彦さん・井上真理子さん(森林総合研究所多摩森林科学園)、奨励賞(35歳以下が受賞対象)は山脇あゆみさん(金沢学院大学)に授与されました。

○優秀賞

大石康彦、井上真理子

「森林体験活動の体系的整理 —実践者の認識に基づく分類—」(野外教育研究 第15巻第2号 2012年)
受賞者の感想

このたびの受賞、心から嬉しく思います。以前から森林体験活動を研究テーマとしておりましたが、1996年に野外教育と出会ったことで、今日に至りました。野外教育と関わるなかで、自分が持っている森林という主体性を再認識し、野外教育を理解しようとするなかで、森林体験とは何かを自問自答してきました。今回の論文は、私自身の答え探しへの野外教育からの回答でもあります。論文で見出された[森林資源]、[自然環境]、[ふれあい]は野外教育の実践現場が備えている要素です。それぞれを深めたり、有機的に結びつけて[地域文化]に昇華させたりすることによって、野外教育のポテンシャルをまだまだ引き出せるのではないかと考えております。

(大石康彦)

栄えある賞を頂き、農学(森林学)から野外教育に関わる身として、境界領域の橋渡しを評価頂いたものと有り難く思います。実は、上司(大石氏)と共同研究を始める際に「指導」されたひとつが「野外教育学会への入ること」でした。また、普段は野心などを表に出すことが無い同氏は、学会論文賞創設時に会場でぼそっとつぶやきました。「いつか、こういう賞が欲しいですね」。当時、駆け出しの私への叱咤激励と思ったのですが、実は、森林(自然)の視点が野外教育に融合することで可能性が広がる事の確信だったと思います。まさに不言実行の偉大な先達と頂いた「今後一層の発展が期待される研究者」としての本賞に恥じぬよう、身が引き締まる思いです。

(井上真理子)

○奨励賞

山脇あゆみ、遠藤浩

「組織キャンプにおける参加児童の社会的行動に関する研究」(野外教育研究 第14巻第2号 2011年)
受賞者の感想

奨励賞をいただきましたこと、非常に光栄に思います。このような素晴らしい賞をいただきましたのは、丁寧に指導して下さった先生方、先輩方、刺激を与えてくれた研究室の友人や後輩のおかげだと深く感謝しております。小学校低学年を対象とした調査・研究は、今後の課題が多く残されている分野であり、継続的な研究が必要とされる分野だと思います。今後も、今回の受賞を励みに、より一層研究を深めていけるよう努力いたします。また、丁寧に、確実に研究に取り組み、一步一步着実に前進していきたいと思っております。(山脇あゆみ)

